昭和62年1月1日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 15

小さな池の大きなカエル

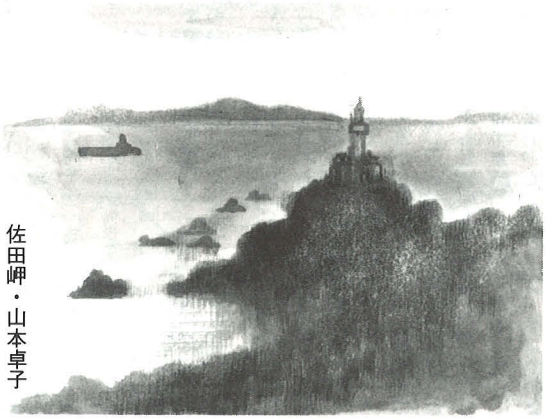
岡田　盛

かつて日本の花形産業であった石炭、鉄鋼、造船業なども、現在では斜陽化し不況業種への転落を予儀なくされている。経済環境の変化とともに、活力ある産業も移り変わっていく。

我々の企業は現在電解コンデンサー用絶縁紙の生産を行っている。電子部品が斜陽化することはなくても、それに使用される素材の絶縁紙が使われなくなるときがくるかもしれない。このことは考えておくべき問題である。いまの商品が十年後、二十年後に使われているという保証はどこにもない。したがって、そのときに備えてたえず次の手、新しい手を考え出し、時代に即応していかなければならない。

「これで安心」などと思ったときから、企業が転落する大きな要素が生まれてくるのである。顧客のニーズが刻々と変化している以上、企業自身が柔軟な発想をもち、エビやカニが脱皮するように自己革新をしていかなければ、厳しいこの経済環境の中で生き残ることは難しい。

電解コンデンサー用絶縁紙の生産は、非常に特殊な専門分野での仕事である。我々のような小さな企業が大きな市場へ参入することもできるが、例えていうなら「大きな池（大市場）の小さなカエル（小企業）」になってしまう。



佐田岬・山本卓子

大きな池は入り込むことは簡単だが、大きなカエル（大企業）がいる中では、小さなカエルはどうしても圧倒され伸びることができない。しかし、小さな池であればカエルが一匹入れば相対的に大きなカエルとなり、他のカエルは入ってくることができない。つまり圧倒的シェアを握れるということになる。

地場産業の振興という点からみても、どこにも真似のできないものを何かひとつ作り出し育てていけば、田舎にいるとか企業が小さいとかに関係なく伸びていける可能性はあると思う。また、単にコストを下げるだけでなく、品質競争によって付加価値を上げることをもっと考えるべきである。

企業が活力を保ち、新しいものに挑戦していけるかどうかは、ひとえに人材の問題に大きくかかわっているといってよい。新しい、優秀な人材を確保するには魅力ある企業でなければならない。魅力とは報酬もあるだろうが、社員が能力を発揮できる場を、働きやすい職場環境を与えられるかどうかということでもある。ひとり一人の性格や能力を見きわめ、社員の潜在的な能力を引き出すチャンスと場を与えるのが企業のトップの役割である。トップはある意味では〝神の手〟を持たされているようなもので、これほど恐ろしい仕事はないと最近考えている。

（ニッポン高度紙工業㈱代表取締役会長）

シンボルのある街の風景

荒木　正彦

私の家族は、私が小学校五年生のとき窪川町から高知市へ引っ越してきた。昭和三十二年春のことである。高知市は、田舎で育った小学生にとって都会で、珍しいものがたくさんあった。

ちょうど春休みで、私は弟と二人で転居先の久万の家から大丸や帯屋町へよく歩いて出かけた。それは、私たち兄弟にとり、今まで体験したことのない冒険であった。なかでも大丸のエレベーターが珍しく、終日エレベーターにのっていてエレベーター嬢に注意され、子供心に傷ついたことを記憶している。

夕方近くになると、私より先に高知へ来た弟の道案内で帰路につくのだが、二人でよく道に迷った。そんな時、決まって追手前高校の時計台が道しるべとなった。「時計台があっちに見えるき、兄ちゃんこっちで」といった具合である。夕日のなかの時計台が余程子供心に強い印象を与えたとみえて、今でもはっきりその光景を記憶している。いまのものより色彩が自然で趣があったように思う。

時計台ほどではないとしても、両親と行った日曜市とか、高知城、鏡川など高知市街の景観の断片を、その時々の行動とともに憶えている。また、子供心に興津の海や桂浜の波といった自然の景観から受けた感動も忘れられない。高知という変化に富んだ風景のなかで育ったこと、そしてそれによって風景の見方が養われたことを幸運に思っている。

◇

最近、趣味の磯づりを通じて、そして仕事の都市デザインを通じて、私の脳裏の風景が再現される機会が増えている。

六年程まえに磯づりを始めて以来、高知の海と接触するようになった。東京に住んでいる関係上、どうしても神津島とか八丈島や伊豆七島に行く機会が多くはなるが、たまに高知の海で釣る機会を得たときなど、格別な気分に浸る。少しオーバーに表現すると、釣りというプリミティブなレジャーを通じて、海に抱かれているような気分になるわけである。これは、私の生まれ育った海で釣りをしているという想いのなせるわざで、自然の景観へ感情をスムーズに移入することができる。

高知市の街並についても、同じことがいえる。故郷として感情移入しやすい街。その高知市街の景観づくりに参加できたことを嬉しく思っている。

高知市の景観づくりにあたって、私が時計台に印象を得たように子供心に感銘を与えることのできるランドマークやシンボルがあり、そして市民に身近かに感じられる街づくりを行いたいと思った。

今日の街づくりでは、こういった人間性のある街づくりが忘れ去られ、どの都市においても商業的あるいは消費的色彩に偏り過ぎる傾向がある。このため都市の個性がなくなりつつあり、地方都市独自のローカリティが忘れ去られているのである。私は、その都市にしかない、高知市にしかない個性に重きを置きながら景観づくりを考えてゆくべきだと思う。街の景観づくりが、遊ぶ・休む・買物をするといったアクティヴィティと一体的に考えられる時代になって街づくりを始めようとしている高知市は、少し皮肉に聞こえるかも知れないが、他の都市と比べて街づくりが遅れたぶんだけ幸運である。

高知市は、高知城・はりやま橋・追手筋そして鏡川という史跡・緑・水に恵まれた比較的きれいな街である。すなわち景観面からストックのある街であるように思う。しかしながら一方では計画という概念に基づいて街が調整されていないために、そのストックが効果的に運用されていない。

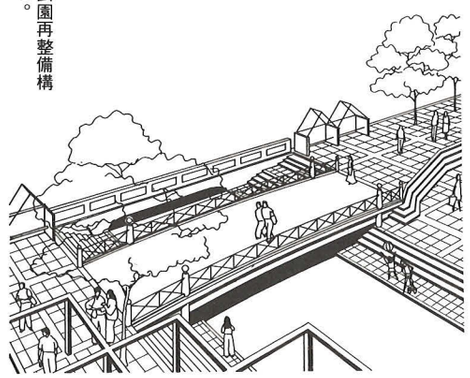
例えば、このたび私が計画に参加したはりやま橋である。全国的に名を知られるのみならず、中心市街地の交通・商業の要所にありながら、それがシンボルあるいは公園として有効に利用されていない状態にある。私は、はりやま橋公園の再整備にあたって、高知市の景観的な特徴を考える必要を感じた。私をはじめとして高知県人に浸透している風景は、水のある景観ではないかと思う。黒潮が打ち寄せる磯、清流の四万十川、身近かなところで鏡川、いたるところに変化に富んだ水のある風景がある。それも湖のような動かない水ではなくて、動いている水である。

これをふまえてはりやま橋親水公園に、高知を象徴する景観をつくるべきだと思った。そこに純真・お馬の像を配して、子供にも観光客にも親しまれるシンボルづくりを行い、高知を代表できる景観づくりを考えたわけである。長い時間が必要であろうが、ぜひ実現を期待したいものである。

高知の日曜市をはじめとする曜市による即席的な街づくりによって、街の活性化をはかることも必要であるが、一方では現在の高知城や追手筋の並木のように五十年先、百年先にも効用をもつ街の景観づくりも重要である。長期的な展望のもとに街づくりを行うべきであると思う。高知のローカリティ、あるいは高知とは、という根本的な問いを忘れての街づくりだけは避けなければならない。

高知市の景観づくりに参加して以来、小学生のころの高知市の印象、現在の高知市の街並、将来の高知市の姿をあれこれと思い描くことが、私の楽しみの一つとなっている。

（建築家）

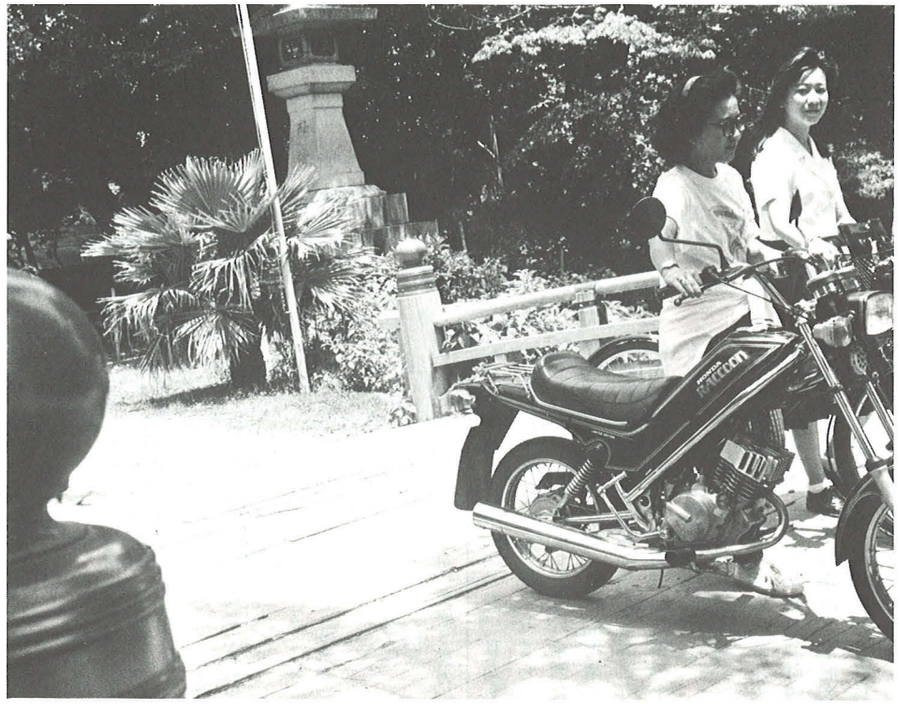


下図ははりまや橋公園再整備構想案のなかのひとつ。

私の風景

藤並神社界隈

清遠　成男



古い歴史をもつ藤並神社で出合ったオートバイの少女。古いものと現代性の対比に興味をひかれました。

読者サービス

大久保　貴誉美

私は書店員。毎日、何百冊もの本が入荷してくる。新刊書をはじめとするそれらの一冊一冊を所定の棚へと陳列してゆく。

「お姉ちゃん、会社四季報はいつはいるかね？」「今日、テレビで紹介していた橋汎子の本は？」「椎名誠の奥さんの書いた自転車……という本は？」等々、雑誌から専門書まで、当然といえば当然の事なのですが、毎日、電話や店頭でお客様の本のお問いあわせの内容は多種多様。

〝TONETS〟等のコンピューターにより、龍馬関係の本をリストアップしたり、書名や著者名が断片的に分っている場合は、調べるのにはずいぶんと楽になった。しかし、コンピューターに入力できない曖昧な情報はずいぶんある。たとえば先日住井すゑの娘さんの書いた本を尋ねられた。一瞬、増田れい子かな、と思ったが、住井すゑとは何となく結びつかない。丁度あった増田れい子の本を色々と調べてみると、あった、あった、「母」と題するエッセイ。結局、お客様のお求めの本は『一人の珈琲』という本だった。

日常の応対の中で、赤面することや珍問答はしばしばだが、住井すゑと増田れい子のつながり、こういう知識は目録やコンピューターにはでてこない。お客様との対話の中からしか得られないものではないだろうか。「商品知識がない」「対話がない」とは、よく聞く書店員に対する耳のいたい評。新聞、雑誌の書評、業界内の新刊情報はもとより、お客様の生の声（情報）に私たちはもっと耳を傾けるべきだと思う。それがひいては、乱造ぎみの出版物の中で、何を読んでいいのかわからない読者に対して送ることのできる、最も大きな〝サービス〟なのではないだろうか。

（書店員）

幅広い市民の参加を

――自由民権百年第三回全国集会――

外崎　光広

今年の十一月二十一日～二十三日の三日間、「自由民権百年第三回全国集会」が、自由民権の発祥地を誇るここ土佐で開催される。第一回は昭和五十六年一月に神奈川県民ホールで、第二回はそれから三年後の五十九年十一月に早稲田大学で開催された。それぞれ三千八百人、二千六百人の広範な市民が参加して、わが国の民主主義の源流を学びあい、今日の民主主義を語りあい、今後の民主主義のあり方を考えあった。

そして今回の第三回集会が最終の集会である。

多彩な行事を展開

昭和五十六年に始まったこの全国集会は、百年前に民主主義日本の建設をめざして立ち上がった、私たちの父祖の活動に学ぶ必要にせまられての企画だった。そしてこの企画に呼応する熱烈な声が、北は北海道から南は沖縄に至る全国にまきおこり、各地に記念集会、民権運動を顕彰する事業、研究会等が実現した。

ことに「自由は土佐の山間より」と、その発祥地を誇ってきた高知では、昭和五十六年度に県と市の財政支援による自由民権百年高知県記念事業実行委員会を組織し、その事務局を知事公室内に設置した。

実現した主な事業は、十七日間にわたった自由民権百年記念展（郷土文化会館）、遠山茂樹、安岡章太郎の両氏を講師とする記念講演会（RKCホール）、島崎猪十馬著の土佐民権『旧各社事蹟』の複製出版、小中高校生の民権作文コンクールなどであった。また県内の図書館、公民館、各種民間団体もこれに呼応し、あるいは協賛し、民権講座、展示会、記念出版、史跡探訪など多彩な、そして有意義な事業を行った。

自由民権運動とは

昨年二月に『民主主義はジープに乗ってやってきた』と題する新刊書が書店に並んでいた。ジープとは日本が一九四五（昭和二十）年に連合国に降伏したとき、わが国を占領したアメリカ軍が全土を乗り回した戦闘用小型自動車である。

この書名によると、民主主義はアメリカがわが国に持ち込んだということなのである。これはわが国の歴史を知らないとんでもない誤りである。

われわれの父祖は百年前に民主主義日本を建設するために、身命財産を犠牲にして奮闘したのである。自由民権運動は農民・商工業者・銀行家・医師・教師・新聞人・代言人・婦人と、広範な市民が参加したわが国最初の民主主義運動である。現行日本国憲法の制定に重要な影響を与えた植木枝盛の「日本国国憲案」と、北川貞彦の「日本憲法見込案」はこの渦中で起草されたのである。

広範な団体、市民が協力

さて、これまでの成果を基礎に、高知市民図書館に事務局を設置し、第三回全国集会に向けて準備がすすめられている。

主催は自由民権百年第三回全国集会実行委員会と高知市文化振興事業団、後援は県・市をはじめ新聞社、放送局、土佐史談会、高知海南史学会など十七団体、協賛は高知県観光連盟、高知県酒造組合連合会など八団体である。

実行委員会は顧問に遠山茂樹（第一・二回全国集会実行委員長）、山岡亮一（高知市文化振興事業団理事長）の両氏をむかえ、実行委員長は山本大（自由民権記念館建設期成会会長）、副委員長は関田英里（高知大学学長）、木原正雄（高知女子大学・高知短期大学学長）、渡辺進（高知市文化振興事業団専務理事）の三氏と外崎光広（土佐自由民権研究会会長）。そのほか実行委員は大坪憲三（弁護士）、橋田憲明（高知市民図書館長）、広瀬典民（高知県立図書館長）の三氏をはじめとする三十二人で構成されている。

明日の日本を考える

民権運動が天も焦がさんばかりに燃え上がっていた当時の、全国の青年政客の間では、土佐を訪ねなくては民権を談ずることができないといわれていた。その土佐で自由民権全国集会が開かれることは、歴史的行事といっても過言ではあるまい。この集会は自由民権と呼ぶわが国の民主主義の源流を、より深くより広く理解する絶好の機会である。

これまでは全国の舞台で活躍した土佐の民権家の言行は知られているものの、この土佐の地でたたかった人民の活躍は、充分に明らかにされていなかった。今度の集会はこれを発掘する機会であるとともに、土佐の民権の解明は、日本の自由民権研究の前進に大きく貢献するにちがいない。

民主主義の現状が心配される今日、県外の人びとともに自由民権を語りあうことは、今日の民主主義を語りあうことであり、明日の日本のあり方を考えあう貴重な場なのである。

（土佐自由民権研究会会長）

集会日程（予定）

11月21日（土）
◆史跡探訪（市内半日コース）
◆開会集会・基調報告
◆記念講演
◆民権市民の夕べ
11月22日（日）
◆シンポジウム
「自由民権と現代」
◆研究発表・パネル討論
◆閉会集会
11月23日（月）
◆史跡探訪（市内・県西部）

上の写真は昭和十二年六月一日～十四日に築地小劇場で新築地劇団が上演した「板垣退助」（佐々木孝丸・原作）の舞台写真。舞台は潮江の浦戸湾岸、中央が薄田研二扮する板垣退助、右端が島田敬一扮する植木枝盛。

（写真提供・竹村義一氏）

通所作業所

涅槃の家

都築　瑞

知恵遅れや障害のある子どもを持つ親の苦しさは、なかなか他人には理解してもらえないものです。そんな親たちが憩い、安らぎ、お互いに悩みをはき出し気持を明るくして、子どもを育て抜くというファイトをもってもらう場として、本来この「涅槃（ねはん）の家」を開設しました。

現在は四人の知恵遅れの子どもたちが通ってきて、小ものを縫ったりワイシャツの糸切り、ハシの袋づめなどの軽作業をしています。そのほかにも自家栽培した野菜を売り歩いたり、バザーでの収益を足して彼女たちの給料としていますが、やり繰りは大変です。

最初は手とり足とり教えなければなりませんでしたが、開所して一年たって子どもたちが自主的に働き出したのが大きな成果です。

ある工場で働いていた子どもは、自分自身にコンプレックスがあったんでしょうか、職場にとけこめずひとこともしゃべらなかったようです。ところがこの家に来たらいくらでもしゃべるようになった。心の底から安心できるのではないでしょうか。

みんないまでは「涅槃の家は私たちの家だ」という気持で、子どもたち自身がこの家を盛り立てるようになりました。

いまいちばんの悩みは指導者が私ひとりしかいないことです。毎日来てくれるボランティアの方は一人いますが、もう一人くらい毎日一定の時間、見ていてくれるような方がほしいと思います。

変ないい方ですが、ほんとうはこのような「涅槃の家」は発展しない方がいいと思います。知恵遅れの子どもたちが自分の望むところで働けるのがいちばんいいのですが、施設もいっぱい、円高のあおりで企業へ勤めるのも難しいという現状では仕方ありません。ですからここで生活・訓練することで子どもたちが希望する道へ行けるようにしてあげたいし、将来はこの子どもたちをどんどん受け入れてもらえるような社会や企業であってほしいと思います。

養護学校を卒業するくらいの知能の子であれば、養護学校という特殊な環境のなかでなく、地域の普通の学校でなんとか育てられないかと思っています。母親たちが、理解ある人たちが協力して地域のなかでみていってほしいです。

そして子どもたちを固定、孤立させないように、みんなが交流できるような、そんな子づくりができる「涅槃の家」にしていきたいと思います。

（「涅槃の家」主宰）

失われゆく文化 二

消えゆく言葉

猪野睦

時代とともに言葉も変っていく。いや使われなくなり消えていくものも多い。生活とつながり、生きて使われてきた言葉が急速に意味を失っていくのである。時代が言葉をおきざりにして進んでいるということだろう。

一年ばかり前のことだった。物部村の国道ぞいのある家で、ちょっとした行事ごとがあって、ぼくも行きずりのまま加わったことがあった。国道の上の集落からも人が集まっていた。そのいくつかの集落へもいまでは車も入り山腹をめぐって十分とはかからない。

だがひと昔前までは、急傾斜の山道を小一時間はかけて登り降りしたところだった。集落から国道へ降りてきて、買物などして背負い帰れば半日仕事に近かったろう。

ヒトハラ起す

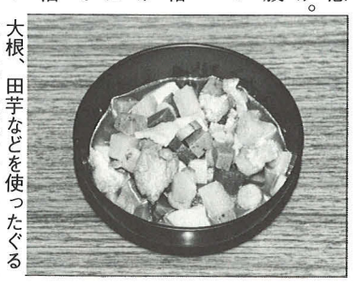
その国道ぞいの家での行事ごとも一段落して一人が帰ることになった。もう午後も四時近かったろうか。その一人が腰をあげると、すかさず女主人が言った。

「まあ、おまさん帰るかね、ヒトハラ起していてや」

はっとした。〝ヒトハラ起す〟、はじめてきいた言葉だった。なるほど、これはこの地方で使われてきた言葉だったのか。

山の上からおりてきて用事をすませ、いくばくかの荷物を背負い傾斜地をのぼり帰っていく。それはここに住むもののかつての日常だった。腹がへっていては山道をのぼり帰る力が湧かない。ひと腹起す、つまり山道をのぼり帰るあいだ持つくらいのちょっとした補給、力づけをしていきなさいという意味をこめた言葉だったのか。それをさりげなく「ひと腹起していてや」と言っているのだった。

むろんいまは山上の集落も車時代である。世代もかわり、もうひと腹起さねばならない条件はなくなっている。この地域の日常生活が産みだしてきたやさしい言葉だったが、おそらくもう意味不明になっていくのではあるまいか。食べてかえってくれという意味とはちがう力づけ、いたわりの言葉に思えた。心動かすいい言葉だった。



大根、田芋などを使ったぐる煮も煮る文化のひとつである。

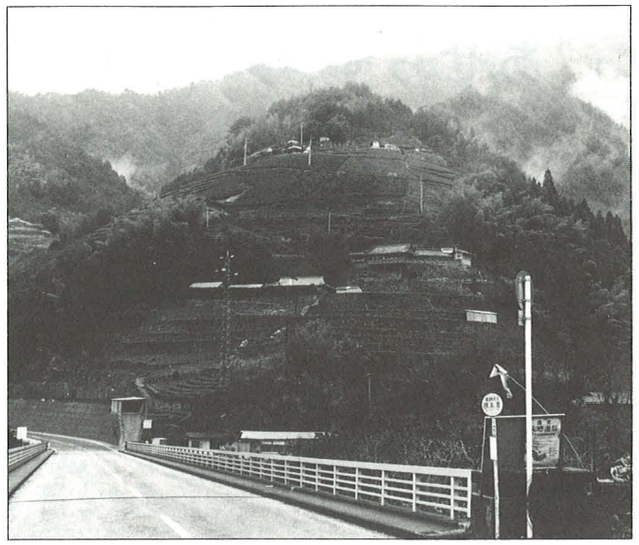
コメのメシ

もうひとつの話も数年前だった。県東部のある漁港で船が港へ入ってくるときだった。魚商人にまじって土地の老人が数人、日だまりで日常話をのんびりしていた。話は幼な友達の消息、こし方になっていたが、老人の一人が言った。

「そうよ、あれもコメのメシよ！」

コメのメシ！ とっさに耳に入りこんできたその言葉の意味がわからなかった。聞くともなしだった話の中身は、若いうちから街にでて仕立屋になり一人前になった人が、店も弟子ももって食えるようになった。出世した。りっぱなもんじゃという意味だった。むろん戦前の少年時代のことを言っているのだった。それにしても生活のなりたつ一人前になっていくさまを、〝コメのメシ〟といういい方もあったのか。

この魚村は山が沿岸ぞいにせまり、耕地がすくなく、昔はイモとムギをつくって食いつないできたところだった。コメへのあこがれは強かったろう。水田はほとんどなく山頂のイモ畑は石を積んだ猪垣が残っているところだった。〝コメのメシ〟とはなんとなくぴったりする出世譚にふさわしい言葉ではないか。むろんいまは山頂の耕地も荒れはてている。



国道ぞいの切り立った斜面に人家が点在する、物部村根木屋付近。

それ以降、〝コメのメシ〟は注意していると、まだあちこちの年配の人のあいだでは使われていたのだった。昭和ひとけたの五十歳なかばの人が、なにかの拍子に使うのである。おそらく親の世代が使っていた言葉がひきつがれたのだろう。

だがそれはもう食えるようになったという現実的な言葉をはなれて、上等、上等、りっぱ、りっぱ、という場合の、そこまでいけば一人前という意味に使われていた。そこそこの仕事をして暮しをたてている人に、「ぜいたく言われん、コメのメシよ」という具合に高知市内に住む人が使っているのをきいた。かなり一般化した常用語に近いものではなかったか。

生活にねざした米を基準にした時代がうみ、使われてきた言葉だった。米過剰という風潮のなかで、もうほとんど通用しない言葉になってきたが、これほどリアルな表現もまためずらしかった。この言葉も大方、意味不明になってきているのではあるまいか。

忘れられる言葉の記録を

さいきんでた『聞き書き・高知の食事』も興味ぶかい本だった。消えゆく味、消えゆくやさい、消えゆく調理法を、いくつかの消えゆく言葉とともに、消えゆくぎりぎりのところで記録している貴重な仕事といってよかった。このなかにでてくる煮菜（にざい）なども忘れられてきている言葉だった。すでに家庭から煮菜そのもの、煮物文化が消えてきており、おそらくいまのままではこの言葉も通用しにくくなっていくのではあるまいか。この一冊は消えゆく文化のための記録を急がねばならぬということをあらためて教えているものだった。〝ひと腹起す〟や〝コメのメシ〟も消えゆくぎりぎりのところにきている言葉に思えた。

『高知県方言辞典』にもこれらの言葉はのっていない。

（詩人・高知ペンクラブ事務局長）

高知市近代年表（三）

明治十五年（一八八二）
4・6 板垣退助、岐阜で刺傷さる
4・16 立憲改進党結成（大隈重信を総理に選ぶ）
4・26 測候所を稲荷新地に設置
4月 神道大社教高知教会所を升形に開設
5・7 海南自由党結成
6・24 高陽新報創刊（国民派）
10・10 日本銀行開業
10・21 大隈重信、小野梓ら東京専門学校開校（早稲田大学の前身）
11・11 板垣退助渡欧
11月 真言宗高野寺、中島町に建立
12月 小野梓『国憲汎論』執筆

明治十六年（一八八三）
1月 馬場辰猪『天賦人権論』植木枝盛『天賦人権弁』刊
3・20 立志社内に海南自由党本部を設置、社屋を後楽館と称す
5・13 土佐郡長が小学奨励試験を強行、民権派闘争開始
6・1 浦戸城灯台建設（不動白色、光達距離12海里）
8・1 小野梓、東洋館開業（明治十九年廃業）
8・29 板垣退助帰県、丸山台で盛大な歓迎会開催
12月 板垣退助立案、植木枝盛記述『通俗無上政法論』刊

◇この年県内に金輪自転車移入

明治十七年（一八八四）
5・9 県庁を致道館跡から帯屋町に移転
7・7 旧藩主山内豊範侯爵となる
8・17 奥宮健之らの政府顚覆計画発覚（名古屋事件）
9・23 自由党員十六人挙兵、警官と交戦（加波山事件）
10・29 自由党解散
10・31 農民数千人が郡役所等を襲撃（秩父事件）
12・4 京城で親日派クーデター起こり、日本軍王宮を占領（甲申事変）
12・6 自由党員の挙兵計画発覚（飯田事件）

明治十八年（一八八五）
2・7 岩崎弥太郎逝去（五十二歳）
4・18 天津条約調印、日清両軍朝鮮より撤兵
5・1 基督教高知教会、中島町に設立
9・20 植木枝盛「貧民論」を土陽新聞に掲載
11・21 馬場辰猪、爆発物買入注文の嫌疑で捕縛投獄（翌年6月2日無罪放免）
12・22 内閣制度確立（伊藤博文総理、谷干城農商務大臣）

◇この年、田辺県令浦戸湾改修に着手（種崎に第一、第二波止を、桂浜にT字波止を修築）

明治十九年（一八八六）
2月 土曜市を本町三丁目に開設認可
2月 高知県尋常中学校を追手筋に新築
4・6 高知座上棟式
6月 山内豊範逝去（四十一歳）
7・13 高知監獄を師範学校跡に設置（大正11年刑務所と改称）
7・15 海軍兵学校設置
7月 物部川流域民が香美郡役所を襲撃（物部川堤防修理費をめぐる民権派の大闘争）

◇この年大林区署、小林区署を設置

高知県建築士会青年部設立10周年

あせらず、ゆっくり行きましょう。

千頭　輝雄

高知県建築士会青年部――何かながったらしい、いかめしい名前がついていますが、実はそんな堅苦しい会でも、いかめしいインテリ連中の会でもなく、有志がざっくばらんに集まった会なのです。

青年部会は創立して昨年でちょうど十年、人間でいえばティーンエイジャー、子供から大人になろうとするところです。メンバーは、約千八百人を擁する社団法人高知県建築士会の会員のなかから、満四十歳未満の有志会員約百人で構成されています。千八百人中百人というのは、おやっと思われるかもしれませんが、有志会員の集まりであることを考えるとご理解いただけるかもしれません。訳もわからないうちに会員にされる会とは違い、会員が自覚をもち、また入会した以上は何らかの役割を受けもつことを前提にしています。

活動内容は毎月一回、第三火曜日に定例会を開き、県内外で活躍している各分野の講師を招いて研修をしています。現在はとくに「土佐の建築」というテーマで、土佐しっくい、土佐材、瓦など土佐独特の建築材料の勉強中です。

また地方にいても中央で活躍している建築家の話を直接聞こうと、毎年一回「サマーセミナー」を七～八月ごろに行っています。第一回目の東孝光氏をはじめ、出江寛氏、安藤忠雄氏、石山修武氏、毛綱毅曠氏などを招いて現在までに十回開催しました。講師のなかには宮脇檀氏のようにすっかり高知を気に入り、以後何回も来高された方もいます。

建築を見狂い、食べ狂い、飲み狂う毎年恒例の研修旅行も連続十年目に突入。東海地方以西はほとんどまわり、昨年十一月下旬には熊本、長崎、福岡を三泊四日で見学しました。

また、青年部会を母体として「高知のまちづくりを考える若い建築家集団」が自ら発生的に生まれました。この会の方が一般にはよく知られているかもしれません。

対外的には異業種交流として、高知県青年林材協会とともに、一昨年はローコスト住宅に挑戦し「ニューファミリーの家」を提案、高須にモデルハウスを建設しました。現在はこれからの高齢化社会にむけて「シルバーハウス計画」をたて、専門家から何らかのアピールをしようと考えています。乞御期待。

このほかにもチャリティーバザー、増改築フェアー、建築相談や帯屋町の土曜夜市での建材販売など数えあげたらきりがありません。しかし、これほど活動しても一般の人たちには会の存在すら知られていないのが現状です。

では将来に向けて我々に課された問題は何か。会の活力は「人づくり」にあるといっても過言ではありません。若い人たちを育て上げ、若い人たちが活発に活動できる状態を作り出すことです。

また、引っこみがちな会を外部に向けてアピールし、少しでも会の存在を知ってもらうこと。この二点に力を入れて動かなければならないと思います。

そのためには自分たちでできることを最大限に行い、線香花火のような一過性のものではなく、継続した活動を続けなければなりません。高知に住む私たちが、建築という専門分野で社会的に貢献する努力を惜しまず、もうあとがない、というギリギリの気持で〝玉〟がつきるまで次々と新しいプランを提案していきたいと考えます。

しかし、あせってもダメな訳で、すこしずつ、階段を一歩一歩上がろうと努力するしかないと思います。月並な言葉ですが、「ローマは一日にして成らず」。あせらず、あわてず、ゆっくり行きましょう。

（高知市建築指導課係長）

映画評論家冠木新市氏を招いた定例勉強会

涙

沢田　明子（文・書）

そこへなぜ行ったか、記憶は定かでないけれど、とにかく一人の少女が物部川畔のいっぽんの大きな山桜の木の下で、うずくまって花を見あげていた。五十年前のことである。

春には珍しくよく晴れた日で、物部川の水は身の穢れを洗い流すように、とろとろと流れていく。誰ひとり通らない堤の上で、どれだけ長い間佇んでいたであろうか。草いきれというようなはげしさはなく、柔らかな春の日ざしの中で、すみれ、たんぽぽ、つくしたちが風もないのにほろほろと揺れていた。くれないの葉と、うす紅色の桜は八分咲きで、その間から紺碧の空が透いて見え、じっと見つめていれば、一層けざやかなコントラストの青と紅である。その天の奥には何かがひそんでいるかのような錯覚さえおぼえる。

この荘厳なまでの美しさを、美しい――と思える自分は、もっとも倖せな人間かも知れないと思う感動だろうか。ただ乙女の感傷に過ぎないのだろうか。涙がとめどなく流れる。

書の美のとりこになったのは、このころだったのである。書の美をどこまでも追いたい、思いつめ、苦悩し、歓喜したいけれど、所詮この天然の美も書の美も、自分の力ではどうすることもできないであろう。それはおおかた自然への畏敬の涙だったろうとおもう。

それから二十年。

五里霧中の書業をつづけた。書展の搬入がもう目近にせまったある秋の日、法師蟬が繰り返し庭の木にきて、せき立てるように鳴いていく。朝から書いては捨て、書いては破り身めぐりは反古の山になったが、一向に気に入った作品ができない。もう北の窓から西日が斜めに入り、かたわらの硯の海には墨汁も少なくなっている。

このころは「書とはいったい何だろう」と自問自答するようになっていた。書とは点と線によって構成された抽象である、ということは判っていても「心」がともなわなければ、いい作品ができない。他の人の詩文を書いていては、どんなに書の技術は優れていても、その心は表現されていないのではないか。書の技プラス思想がなければならないと、しきりに考えるようになっていた。

こちら向けわれもさびしき秋の暮

芭蕉

芭蕉が太虚庵という書の師の画像に向って、さあこちら向いてくれぬか、と呼びかけた句である。この句をもう何十枚書いたであろうか、いくら書いても私は芭蕉の胸中へは入れない。いい作品ができるはずがない、と思うと筆がぜんぜん動かなくなってしまった。自分の無能力さか、句からうける寂寥感か、涙がこみあげてきて仕方がなかった。

自分の心象を作品に書きあげようと決めて、作句をはじめたのはこのころからである。

それからまた二十五年。

書をはじめたころの涙。書に行き詰ったころの涙。つぎに流す涙は多分、私の体が動かなくなって、筆を折らねばならなくなった時であろう。

（書家）

「山」

高知漫画集団

燃えろ！土佐のマンガ

平山　昌幸

高知は漫画王国と言われる。有名なプロが輩出し、現在も活躍中だからであろう。土佐人には元来その風土や歴史等に起因し、権力に対する反骨の血が流れていて、底抜けに明るい南国の県民性とともに漫画家の生れ出るエネルギーが蓄積されている。これら異骨相精神を画で表現したものが、漫画の源流と言われる風刺、ナンセンス漫画である。

戦後漸く社会も落ち着きはじめた昭和二十八年、高知新聞のマンガ教室へ投稿していたアマチュアグループが二十四人集まり「コウチマンガクラブ」を結成、高新紙上に発表したり大丸でクラブ展を開き盛んに活躍したことだった。

しかしこの頃から劇画やアニメ、イラスト等が盛んになりはじめ、個人では活動するもののクラブとしての活動は鈍化し休止状態となった。

昭和五十三年六月、大先輩やなせたかし氏をメインにクラブ出身のはらたいら氏、矢野功氏、それに黒鉄ひろし氏、岩本久則氏等プロの参加を得て「高知マンガまつり」が高新文化ホールを中心に開催された。まつりの後再び土佐のアマチュア漫画の火を燃え上がらせようと「高知漫画集団」を結成、同好の士十余名が集まったが、若い人たちの参加が意外と少なくメンバーの高齢化も目立ちはじめた。

今後は若い人とともに、漫画高知の心意気を何らかの形として残したいものである。

（高知漫画集団会長）

連絡先　六五―八四九三（沢本）

高知化石研究会

珍しい化石を探して

三本　健二

高知県の地質は古生代から新生代まで各年代の地層が見られ、さまざまな化石を産します。横倉山、佐川町、南国市・領石などは全国に誇る化石の産地です。

この恵まれた環境にあって、私たちの会は昭和五十二年九月に発足しました。現在は同好者十三人の集まりで、会員の協力による研究、化石に関する知識（古生物学）の普及という高い目標をかかげています。

活動は約二カ月に一度の割で野外での観察・採集を主体としており、これまでに一般の方にも呼びかけて採集会も十回ほど催しました。四億年前のサンゴや三葉虫（横倉山）をはじめ、二億年前の貝と一・五億年前のサンゴ（佐川町）、一億年前の植物やアンモナイト（領石）などさまざまな化石を採取し、過去二回高知市民図書館で展示しました。

昨年十一月には会の結成十周年を記念して五十四ページの写真集「高知の化石」を出版しました。本書は会員の所蔵する県内産の化石およそ二百八十点を三十の図版に収め、解説しています。古生代から新生代にわたる化石を掲載した写真集としては、本県初の試みです。広く利用していただけることを願っています。

この出版を機に、他県の同好会とも交流をはかり、行動範囲も県下全域へ、さらに県外へとひろげていきたいと考えています。

化石に関心をもつ、意欲ある方の入会をお待ちしています。

（高知化石研究会事務局長）

連絡先　七五―三四五六

秦史談会

地域の歴史を発掘

松本　紀郎

高知市街の北に連なる北山には親しみを覚え、また郷愁を感じる人も少なくないと思います。久万川を隔て静かだった農山村も、いまや住宅の海と化して、古墳群や古代寺跡などの遺跡や、あの道この辻にあった旧跡も、埋もれあるいは忘れ去られようとしています。

こうした先祖の跡を掘り起こし、記録して後世の人達に残しておこうと、昭和五十九年に「秦史談会」を結成し、以来、例会や会誌発行（ともに二カ月に一回）を続けてきました。

史談会というと、とかく堅苦しく感じられますが、郷土史を愛好する人たち（会員は現在二十八人）の親睦を第一の目的としています。現在二十号まで発行した会誌『秦史談』も会員による手作りで、お世辞にも立派とはいえませんが安く上げるのも特徴です。幸いこの道の学識経験者の方も多く、土地の事情に詳しい地元の方と新転入者をまじえ、みじかい期間ではありますが予想外の発展を見せております。狭い土地のことゆえ種切れを心配した向きもありましたが、夢とロマンは益々広がります。

今後は秦地区のことだけにとらわれず、市内の他の史談会とも連絡をとり、情報の交換などを中心とした交流会なども持ちたいと思います。運営方法、会員の拡大など反省や研究の余地は多くありますが、地味でも息長く続けていきたいと考えております。

御協力よろしくお願いします。

（秦史談会世話人）

連絡先　七五―六六七一

高知日独協会

ワインを飲んで文化交流

伊藤　富雄

私たちの会は昭和五十五年八月、日本とドイツ語圏諸国との友好親善、文化交流を目的に設立されました。現在二百人を越える会員のなかには、一九二〇年代から三〇年代初頭の「ウーファー」に象徴されるドイツ映画の黄金時代を忘れられずにいる人、ドイツ語に弊衣破帽の青春時代の思い出を重ねて懐かしむ人、ひたすらドイツワインやビールを飲む機会を楽しみにしている人などじつに様々です。

週一回のドイツ語会話の講座のほか、「モーツァルトの世界」「肌で感じた西ドイツ」などドイツ文化全般にわたる内容の講演会を年に二～三回開いています。また夏にはビアカーデンを借り切ってのビール祭り、ドイツ料理やケーキ作りの講習会、年末に行うクリスマスパーティーなど、活動も多彩です。

殊にドイツ映画の上映という点では現在までに五十本以上を上映し、東京・大阪といった大都市はともかく、地方都市では高知がいちばんではないかと密かに自負しています。

他国との文化交流、友好親善といったことは一朝一夕になるものではなく、また大上段に構えてもうまくいくものではありません。ときにはワインやビールを飲み、ドイツ映画や音楽を楽しみつつ、ドイツ人の信条や考え方を理解していくことも意義あることです。そうした機会を今後も大いに作り、あせらず、ゆっくり、休むことなく活動していきたいと思います。

（高知日独協会理事）

連絡先　七五―七六四〇

いのち二題

鴨田小学校六年

山崎利忠

〈一〉

うずらがたまごをうみそうになっている
ということ　は
もうそこまで
いのちがちかづいてきたということです
みょこみょこと
しんけんな顔をしている

〈二〉

たき火をしている途中
竹が
ぽんぽんとなりました
おれは　力持ちだぞ
おれは　力持ちだぞ
とさけびながら
まわりのけしきをゆらせている

風伯

伍作のごたく

こうち、コウチ、高知。

「こうち」の漢字を広辞林でみると、拘置、狡知、荒地、耕地などと、あまり感心しない用語が並んでいる。わが高知は、むかし遠流の国、であったにせよ、いまの高知をくらいイメージでみられると、つらい。

戦時中に、「放浪記」の作家、林芙美子が、初めて高知へ来たとき、

『――ご当地を、僧俊寛が流された鬼界が島のように想像してました。でも、来てみたら、空は青く、明るい土地柄だとわかりました』

と、言った。

林芙美子の談話は「錯誤」にもとづくことであるにしても、よくよくのこと、と思った。

ところで、「錯誤」といえば、無私無欲で、芸ごと（芸術分野の）に徹している、と思っていたのに、実際は、マネー本位に徹して、芸ごとを叩き売りしている人がいる、とおおとい臍野緒之介君（匿名）から聞いた。

そのお方は、はたしてホン者か、ニセ者か。その判別は「錯誤」の眼鏡をはずして、よくよく視ないと、わからない。が、世間一般のひとは、眼鏡がくもって視えにくいから、つい芸術の抜け殻みたいな商品に、手を出してしまう。

さて、われらが高知に、ホントのホンモノ芸ごと人は居るだろうか。居たらぜひ、高知市文化振興事業団にお呼びなされて、ホンモノのご意見をお聴きなされたら――。

（只野伍作）

脚本募集

ミュージカル龍馬

龍馬のこころ、生きかたをミュージカルで表現して下さい。

カット・黒田矩彰

当事業団では、一昨年の龍馬音楽祭を引きつぎ、龍馬をテーマにしたミュージカルを制作します。六十三年三月に曲を発表し、市政百周年にあたる六十四年四月に上演予定です。

龍馬の魅力は数限りなくありますが、従来にない視点、手法で現代に通じる新しい龍馬像を描き、龍馬のこころを伝えるミュージカル脚本をお寄せ下さい。

応募要領

●龍馬をテーマにした自作、未発表の作品に限る（四百字詰め原稿用紙に縦書きのこと）
●上演時間が二時間程度のミュージカル作品（三幕程度。歌詞についてはイメージのみの記入でも可）
●原稿に住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記のこと
●応募作品は返却しません（コピー原稿は不可）

賞金　一席　二十万円（一編）
　　佳作　五万円（二編）
締切　昭和六十二年四月三十日（当日消印有効）
入選発表　昭和六十二年六月上旬（本人に直接通知し、また新聞等を通じて発表いたします。）

◉入選作品の著作権は主催者に属し、上演に際し加筆する場合があります。

作品募集

第3回 高知の映像コンテスト

郷土の風物、生活、行事などを漸新な視点と豊かな表現によって活写し、多彩な郷土の記録をお寄せ下さい。写真・ビデオの2部門があります。

祭り／曜市／河川
まちの景観・美観
高知の見どころ・旧跡
地域の活動／生活の中の文化

応募締切　1月20日(火)
入選発表　2月中旬

◆作品は事業団まで郵送または持参して下さい。応募資格は制限ありません。

推　薦

第3回 高知市都市美デザイン賞

昭和61年中（1月1日～12月31日）に高知市内でつくられた建築物や建造物のなかから、優れたデザインで、親しみややすらぎを感じさせ、都市美の向上に寄与するものをご推薦下さい。

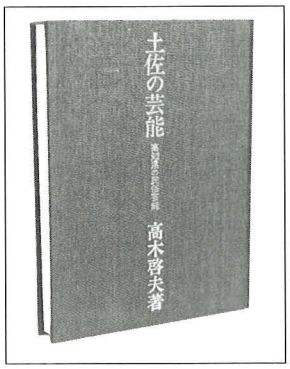
住宅／店舗／工場／ビル／並木
公園／広場／生け垣／道路／橋
壁画／彫刻／モニュメント等

受付締切　1月20日(火)
入賞発表　2月下旬

◆詳しくは当事業団まで。

〈好評発売中〉

土佐民俗芸能の集大成
土佐の芸能
高木啓夫著
定価四八〇〇円



高知県における民俗芸能研究の第一人者、高木啓夫氏の長年にわたる研究成果をまとめたもので、県内各地区の民俗芸能を詳説しています。

市内主要書店のほか当事業団でも販売しています。ぜひ一冊お買い求め下さい。

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目二番三号
TEL（〇八八八）㉓四三六五
郵便振替　徳島8-14869